

2010年 6月 15日 現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2009

課題番号：19720164

研究課題名 (和文) 戦後における「母」の表象に関する基礎的研究

研究課題名 (英文) The basic research about representation of Mather in Postwar Japan

研究代表者

大串潤児 (OGUSHI JUNJI)

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号：90324219

研究成果の概要 (和文)：本研究の目的は、民衆の表現活動を中心に、地域社会運動、教育 (社会・歴史教育)、大衆文化の三つの局面にわたり「母」ということばで表現される戦後日本の諸問題・諸思想について、その分析のための基礎的研究を行うことである。その成果は、①地域における母親運動、②岩手県における生活記録運動について、その地域社会での組織形態・「母の歴史」をめぐる諸論点、などについて分析する基礎史料を得たこと、である。

研究成果の概要 (英文)：The purpose of this survey is to collect Basic Materials about People's representation concern "Mather" (母), three aspects(1)Social Movements in local society, (2)Education, (3)Mass Culture. The results are as follows ; to obtain materials about (1) Japanese Mothers Congress (日本母親大会) in Local society and (2)The women's writing group in IWATE Prefecture. These materials are contribute to analysis of form of writing group association, "History of Mather" (母の歴史) - People's representation in Postwar Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,700,000	0	1,700,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	480,000	3,780,000

研究分野：日本史

科研費の分科・細目：人文社会系・人文学・史学・日本史

キーワード：日本史, 社会教育史, 大衆文化史, 生活記録, 社会運動, 地域女性史

1. 研究開始当初の背景

本研究は、日本近現代史研究について、(1)1950年代における民衆の「主体性」に焦点があてられつつあること、(2)高度成長期までに視野にいたった地域社会の文化変容を論じる段階

にあること、(3)メディア論・ジェンダー論・表象分析・文学史・家族史などとの相互乗り入れをしつつあること、という認識に立って構想された。

具体的には、上記の諸課題にわたる重要なテーマとして「戦後における「母」の表象」をとりあげ、(1)母親運動に代表される地域女性の社会

運動における「母」の問題、(2)「母の歴史」に代表される民衆の表現活動・文化運動における「母」の問題－社会教育・歴史教育論も含む、(3)大衆文化における「母」表象、といった論点を構想した。

本研究が主な対象とする時代は、1950～60年代であるが、この時期は「母」の問題に関わって、(1)「軍国の母」イメージに象徴される戦時経験とのかかわり、(2)鶴見和子・木下順二編『母の歴史』(河出書房新書、1954年)に代表されるサークル運動や「母の歴史」を明らかにしようとする多様な文化運動・学習運動(歴史教育分野での作品も含む)、(3)必ずしも「母の歴史」を前面に出してはいないが、文章のなかでの論及が広汎に見られる「生活記録」運動(とりわけ地域における婦人会、青年団、学校教育における諸実践)、(4)さらに「母親大会」・「母親運動」という「母」という問題系ないし立場を前面に打ち出した社会運動が地域社会においても広汎に展開している。

また、文化史的に見ても、この時期は、50年代にブームを迎える「母もの」映画や浪曲・股旅ものなどの存在がある。こうした動向を批判的にとらえつつ展開された社会教育領域における啓蒙活動(とりわけ嫁・姑関係解決)のなかで「農村の母親」を扱った文化映画・教育映画・記録映画が作成されている(1954年、岩波映画「ひとりの母親の記録」など)。こうした1950～60年代は、多くの領域において「母」といった表象・問題群が議論、表現された時代でもあった。

さらに、1950年代から60年代にかけての地域社会の変動という事態のなかにあつては、女性の権利の問題、家族関係の問題は、社会運動・文化運動(社会教育・歴史教育運動)にとって最大のテーマを成し、同時に展開しつつある大衆社会状況のもとでは「母もの」映画に象徴されるイメージの持つ意味も無視できない。

「母」の表象といった場合、教育学における調査(山村賢明『日本人と母』東洋館出版社、1971年)、大衆文化における表象分析(石子順造『子守唄はなぜ哀しいか』講談社、1976年)などの先駆的業績を除けば、地域・文化に焦点をあてて各領域の問題群を相互関連的に分析した成果は乏しい。女性史・ジェンダー史のなかでも「母性」分析として展開されてきはいるが(脇田晴子編『母性を問う』人文書院、1985年)、戦後の問題は課題として残されている。社会運動・女性運動史の分野では「母親運動」研究が一定の蓄積を持っているが、多くは史料発掘に待つところが多い(『草の根の母たち 聞き書き・高知の母親運動』ドメス出版、1991年や伊藤康子の諸論文など)。文化史・思想史の領域においていくつかの成果が現れつつあるも(成田龍一・三輪泰史の文化運動・「母の歴史」・サークル研究、水口紀勢子『映画の母性』彩流社、2005年)、文体を含む民衆の表現とそれを支える集団、地域社会の在り方にまで論点を進めるにはいたって

いないように思われる。

本研究は個々には論及されつつも基礎的な史料状況の整理・把握も不十分であり、かつ総合的な把握も進んでいない領域を考察していくための基礎的研究である。

2. 研究の目的

上記のような研究開始当初の背景認識に基づき、本研究では全国的な雑誌などに掲載されている「母」の単なる言説やイメージの分析ではなく、何よりも民衆自身の表現活動の意味という媒介項を設定し、地域社会における社会運動での議論(「母」という問題設定、状況認識の歴史的個性)、こうした状況をとりかこむ大衆文化の在り方をも視野に収め、(主体)－(運動＝問題)－(状況)の3つの側面から問題を把握しようとするものである。その際、何よりも依然として存在も不明瞭な各地域の生活記録文集などを積極的に発掘することが必須の課題となる。

「母の表象」の問題性は、当該時期の家族制度のあり方に規定されると同時に、戦前期以来のナショナリズムの一表現としても把握可能である。同時に50年代における嫁・姑問題、高度成長期に問題化する「子育て」といった領域にも深く関わっている。こうした戦後日本社会にとっても重要な課題を、地域社会、女性の表象、自己表現といった論点を通じて明らかとすることが本研究の目的であり、その前提となる基礎的史料収集に多くの時間と労力が割かれることになる。

具体的な研究課題は、

- (1)長野県下伊那郡高森町(山吹村)を中心とする文化運動について、史料整理を進めるとともに、その全体的な運動の組織構造、地域社会での結合関係(それぞれの運動の相対的位置)を明らかとし、以上をふまえて同地域で展開された記録映画(「ひとりの母親の記録」)をめぐる地域社会の動向、人びとの意識について明らかとする。「記録映画」を作品素材としつつも、地域文化運動の具体的史料を用いた「記録映画」の地域文化史、を構想する。
- (2)長野県下伊那地域を中心としつつも、歴史教育分野もふくめてさらに広く作品を収集しつつ「母の歴史」と総称された生活記録運動における「母」像について分析する。
- (3)1950～70年代における女性集団(青年団運動、地域婦人会、高度成長期には「若妻会」をも含む)について、主として岩手県を対象に、その表現媒体である機関誌・紙、文集の発行、所在の確認を行う。そこに表現された「母」の理念、家族関係、についての思想を明らかとし、高度成長期以降についての一定の見通しを得る。

(4)1950年代における社会運動の有力な担い手であった「母親運動」について、長野県の事例を中心に、地域社会にとっての母親運動の意味という視点から、その基礎過程、彼女たちが問題にした地域社会のあり方や、家族関係、「母の役割」の意味について分析する。

(5)以上に加え、社会運動・文化運動に力点を置いた「母」の表象分析に対応させるかたちで、この時期の大衆文化における母親イメージについて、主に「母もの」映画批評を素材としてその意味を明らかにする。

3. 研究の方法

研究目的に即して、具体的な研究課題を以下のように設定し、史料発掘・整理といった初歩的な段階からの研究を実践した。とりわけ地域史史料の発掘には力点を置いて、単なる言説の分析＝評価にならないように配慮した。史料所蔵先の都合にもより調査・整理が進捗しなかった場合もある。

(1)長野県を対象とした文化運動・社会教育関係史料の調査整理(長野県下伊那郡山吹村宮下道彦家文書、長野県婦人会関係史料、長野県母親運動史料)。

下伊那郡に焦点を当てた理由は、第一に社会教育分野における「母」の問題を考察する素材の一つである文化映画・教育映画(1954年、「ひとりの母親の記録」)のロケ地＝山吹村があり、そこでは公民館活動を通じた地域社会教育・文化運動が活発に展開していた地域であること。第二に、前掲・鶴見・木下編著『母の歴史』執筆者の多くが下伊那出身の「紡績女工」であること、そして地域の青年たちとの交流を行っていたこと、である。下伊那では、青年団・婦人会関係の記録を調査すると共に、山吹村の公民館長宮下功関係文書(御遺族である宮下道彦家文書)の調査整理を実施した。

(2)岩手県を対象とした婦人会・生活記録運動関係史料の調査発掘と収集。補足として秋田県の生活記録運動関係史料も収集する。

岩手県を対象として選んだ理由は、第一に保健関係の雑誌ではあるが保健婦や地域農民の生活記録、生活問題にも多くのすぐれた評論・作品が掲載されている『岩手の保健』誌をめぐって一定の研究蓄積があったこと、第二、広汎な生活記録運動の展開は知られていたが個別的な研究は史料発掘の段階から行わなければならない状況であったこと、である。

広く東北地域を視野に入れつつも、すでに研究代表者が史料整理・収集の蓄積をもっていた秋田県(横手市・『週刊たいまつ』月刊た

いまつ』、能代市・『山脈』『秋田のこだま』)を比較参照のためより一層の史料収集を行った。

(3)地域における母親大会関係史料の収集。

日本母親大会連絡会・河崎なつ記念母親運動資料室、日本教育図書館所蔵の「母親しんぶん」を収集するとともに、各地域で編集発行されている県・市町村レベルの母親運動史を可能な限り収集する。

(4)社会教育・歴史教育・映画関係雑誌記事の収集。

地域における「母の歴史」教育実践や社会教育実践、「母もの」映画に対する批評、母親大会関連記事、を中心に網羅的に収集する。

4. 研究成果

本研究では以下の研究成果を想定していた。第一に、「母」の表象の特徴が、民衆の表現レベルから明らかとなる。第二に、その表現が一面で影響を受けつつ、同時に対抗していた大衆文化における「母」イメージとの関連が明らかとなる。第三に、地域社会において「母」という問題を理念として打ち出した社会運動の特徴が明らかとなる。以上を通じて、これまで別個に検討されてきた社会教育史・教育史分野の成果(生活記録運動論)、大衆文化や映画論における成果(ドキュメンタリー映画論など)、さらには社会運動史研究における成果を、可能な限り地域社会に視座を置いて、「母の表象」とその論理を、総合的に把握しようとした研究であった。

その成果は、多く史料調査にその労力を費やしたかたちとなるが、以下の諸点にわたる成果を挙げた。「基礎的」研究として、さらなる論文化や後述する今後の研究展望に有益な成果であったと考える。

(1) 長野県においては、①山吹村宮下道彦家文書の史料調査は研究代表者および史料所蔵者の都合により十分な進捗が出来なかった、②長野県婦人会関係史料として「婦人問題研究集会」(第1回～)記録を収集できた、③長野県母親大会関係史料を収集できた。②および③については簡単な文書目録を作成することが出来た。

母親大会記録については関係者の協力により引き続き史料整理および聞き取りを継続していく予定である。また、河崎なつ記念・母親運動資料室での史料収集も引き続き検討する。

婦人会記録については、長野県婦人会館所蔵資料については目録整備を継続実施する予定である。

宮下道彦家文書についても同様。

- (2) 岩手県においては下閉伊郡岩泉町を中心とした生活記録運動の機関誌および関連史料、史料所蔵者ほか関係者からの聞き取りを実施することが出来た。

収集できた史料は、岩泉・下閉伊「生活をつづる会」編、『働く母』(のちに『おんな』と改題)・創刊号から終刊号・及び関連史料(抜粋は三上信夫編『埋もれた母の記録』未来社、『おんなの苦闘史』彩流社などに収録)、金ヶ崎町婦人団体連絡協議会編『働く婦人の文集』・創刊号～終刊号(一部欠)・及び関連史料(抜粋は及川和浩編『嫁と姑』未来社)。いずれも、従来から比較的よく知られていた生活記録文集であるが、抜粋記録集はあるものの、全号揃いで把握、分析する基礎が整備された。

また関連して、岩手県生活記録運動にかかわった知識人・牧瀬菊枝の史料や、国民文化会議「生活記録分科会」関係史料、保健婦の生活記録なども収集できた。

- (3) その他、地域における母親運動については今回収集できた史料を元に、は母親大会の分科会での論点を紹介する程度に止まったが、長野県の事例を単行本で叙述することが出来た(「5. 主な発表論文等」[図書]①参照)。

生活記録運動、「母の歴史」に表現された「母の表象」の問題については、主として鶴見和子・木下順二編『母の歴史』を素材として、「世代」論という限られた論点ではあるが、論壇における議論との関わりで分析することが出来た(同、[雑誌論文]参照)。

- (4) なお、本研究のなかで最大の成果の1つは、前述のように岩手県下閉伊郡で1960年代から展開されていた生活記録運動の機関誌(『働く母』『おんな』)を全号収集出来たことである(1部欠であるが岩手県金ヶ崎町『働く婦人の文集』も同様に収集できた)。1960～2000年代にまでわたる地域社会運動・医療問題・家族論をも示すことができる本記録は近日、論文集として公刊の予定である。

大衆文化関係については、浪曲・股旅もの研究の専門研究者とのあいだで意見交換を行い、今後の研究の方向性について示唆を得た。

近年、改めて戦後社会運動史への関心が高まりつつあるが、本研究はその基礎的な史料を提供したことに意義がある。とりわけ生活記録運動、母親運動の地域社会史を構想する基礎的な史料状況を把握することが出来たことは大きな成果であった。さらに、その史料が、単なる社会運動のとどまらず民衆の自己表現活動との接点(生活記録運動)をも含み、とりわけ岩手で収集

できた事例が1960年代から2000年代まで継続していた活動であったことが重要である。

岩手の事例は、そのタイトルに表現されているとおり(『働く母』)、「母」をその生活記録の担い手、表現者とした動きであり、山村・漁村の労働のあり方や子どもとの関係、教師との関係、「母の歴史」、といった多くの論点＝主題を持った文章を含んでいる。サークル運動や「母の歴史」研究が、主として青年女性によって書かれ、担われた集団や作品を分析しているのに比して、この岩手県の事例(金ヶ崎町の『働く婦人の文集』も含む)は、「母」自身が参加した生活記録運動として独自の意義を持つといえよう。さらに近年、大門正克『日本の歴史15 戦争と戦後を生きる』(小学館、2009年)で積極的に紹介された岩手県南・農村地帯における社会教育活動・遺家族問題、若妻会、「生命を守る」地域婦人会運動と比較しても、山村の事例であること、女性同志の組織のつくりかたと文体(共感の構造)、といった点においてまた異なった論点を提示できると考える。

海外においても戦後日本の生活記録運動への関心が高まりつつあるが、それらは概ね代表的な作品の分析に止まり、地域での具体的事例の発掘は今後の課題となっている。こうした状況への本研究の貢献は大きい。なお、大衆文化関係についてはその膨大な関連記事の分析は今後の課題である。

今後の展望として、前述のように岩手県の事例を対象とした論文を発表する予定であるが、ここでは『働く母』と題した生活記録文集を対象に、(1)地域社会における女性組織の在り方(＝婦人会や「母と女教師の会」など)、「母の歴史」の持つ意味、地域社会のなかでの女性労働の意義について分析を深めていく予定である。

さらに大衆文化領域の論点を深め、運動・表現・大衆文化の3局構造を相対的に把握するための分析を進めていく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①大串潤児, 戦後日本における「世代」論の問題領域, 歴史評論, 698, 2008年6月, 44-57, 査読有

[図書] (計2件)

①信濃史学会編, 信毎書籍出版センター, 2008年2月[共著], pp137-141, 225-251

②森武磨編, 現代史料出版, 1950年代と地域社会—神奈川県小田原地域を対象』, 2009年6月[共著], pp195-226, 319-354

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大串 潤児 (OGUSHI JUNJI)

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号：90324219